

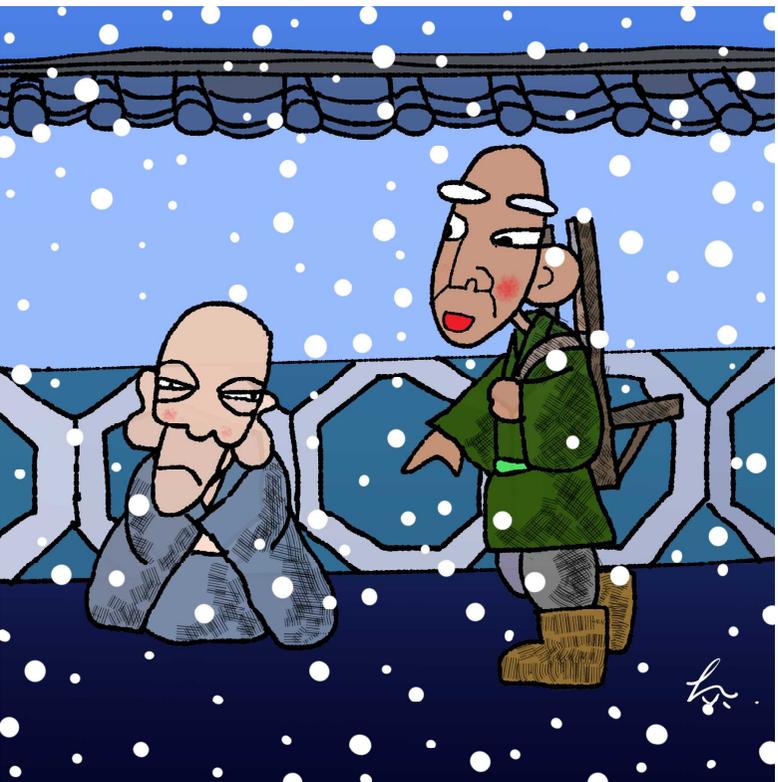
大歳の客・隠岐郡海士町保々見

令和3年8月24日

収録・解説・酒井 董美

たまたよし

イラスト・福本 隆男



語り手 徳山千代子さん  
 (明治37年生まれ)  
 収録・昭和52年4月30日

## あらすじ

昔、お金持ちの家があり、近くには貧しい貧しい一軒の家があり、おじいさんとおばあさんとが暮らしておりました。

お金持ちの家では年の瀬なので、お餅をついて騒いでいました。

一方、の家では、餅をつくどころか、年越しをするのに粟一升しかなくて、困っていました。

普段、炭を焼いたり、薪を取ったりして、村へ持って行って売って、それで生活をたてておりました。

「じいさんよなあ、あの炭を売って仏さんや神さんに供えるもんでも買わないか」おじいさんは寒い中を、その炭を売りに出しました。

長者の家にはみすぼらしい老人が門に立って、「三日も食べんとおつて、お腹が減るし、何でもいいから恵んで」と言ったら、年男が「ちよっと待つとれよ。旦那さんに聞いてくつけん」と入って行きました。おじいさんが、「旦那さんが、乞食にはやるもんがな

いけん追い出せ、言ったけん出て行け」と、追い出して門を閉めて入ってしまった。

炭売りにきた貧しいおじいさんが通り、「じいさんや、具合でも悪いことあねえか」と言う、「腹がすいてご飯一杯も呼びようか思ってた。頼んでみたけど、『乞食に食わせるもんじゃない』と戸を閉められてしまい、こうしてしやがんでおつたようなことだあね」と答えた。

それを聞いたおじいさんは、「何もないけど、わしのところへ行かあ」と、その老人を連れて帰った。

そうして、老人を家へ入れたら、その老人は気の毒がって庭の隅のムシロの上に座って、「わしや、ここでもいいけ」と言つて一服したけれども、「おじいさんやおばあさんは、何ちゆうこと言わつしやる、この寒いに、炬燵に当たつても寒いに、はや、ここに上がらつしやい」

二人で手を取つて、老人を座敷に上げてやり、どんどん薪を焚いて当たらせてあげた。炭売って米一升買ってきた。これを炊いて食べらしてやれよ。「明日の正月はどげでも、今夜、お客さんがござつた。い

い正月だからお粥をお客さんにたくさん食べさせてあげようや」とお粥を炊いて、「さあ、食わつしやい。腹いっぱいになつても食わつしやい。遠慮すんなつしや。こう言つて、二人が老人をだいたいにお腹いっぱい食べさせて、寝るときには一枚だけの煎餅布団をその老人にかけてあげて、自分たちは庭の隅にあつたムシロを取つてきて、二人仲間に着て寝た。

朝、目が覚めてみたら、老人は藻抜けのカラで姿が見えない。

二人がふいと庭に降りて眺めたら俄が三俵積んであり、その上にお供えの餅が乗せてあつた。

「こりやありがたうことだ。あのおじいさんは乞食じやない。あれは金(かね)の神さんだわあ」。

## 解説

年の夜におじいさんの家へ泊まつたのは、正月の福の神が姿を変えたものであることが、この話の中から理解できる。したがって、祖霊信仰を踏まえた貴重な昔話なのである。

(元島根大学法文学部教授)

